

# 児童の描画発達

---

原田 宗忠  
(愛知教育大学 心理講座)

# はじめに

## —本日の流れ—

1. 1,2歳児の描画
2. 3,4歳児の描画
3. 5,6歳児の描画
4. バウムの発達
5. 子どもと色
6. いくつかの提言

注) 年齢は、実年齢で記述しています。

# 1. 1、2歳児の描画

---

# 1歳前半の描画

- ・描くあそびは、1歳ころから始まる。写真1のような、点々から始まる。
- ・描画の前提として、描くものを持つ能力が必要。また、紙の抵抗に負けない力も必要。
- ・1歳前半(1歳3～5か月)の描画は、肩のみを支点とした腕の運動の軌跡。弧状の往復線。これが徐々に横に太っていく。



写真1 1歳ごろ 描きはじめ、「点々」

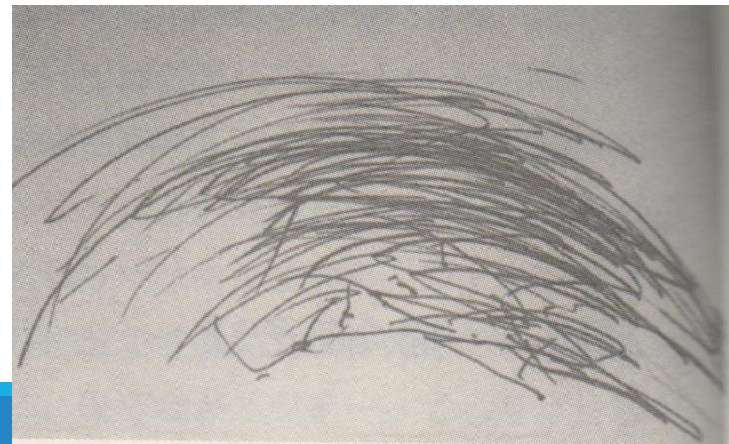


写真2 1歳前半期 「弧状の往復線」

# 1歳半の描画

- ・1歳半の描画は、肩とひじの2点を支点とした描画になる。1歳前半の弧状の往復線から、ぐるぐる丸へ。
- ・1歳8～10ヶ月になると、肩とひじの協応が進み、連続したぐるぐる丸へ。ぐるぐる丸は、自我を外に広げる行為、感情の表出と捉えられる。
- ・なお、1歳後半には、「自我」がくっきりし、イヤの連発も生じる。また、言葉の獲得もすすむ。

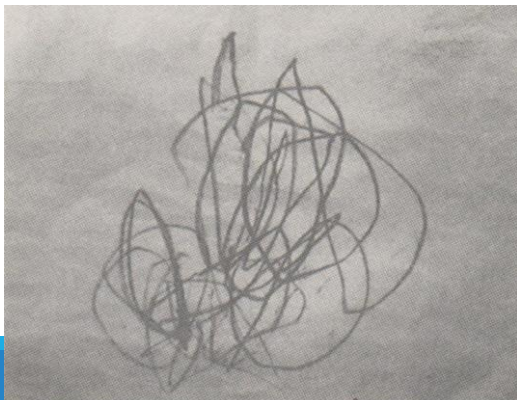


写真4 1歳半頃「ぐるぐる丸へ」

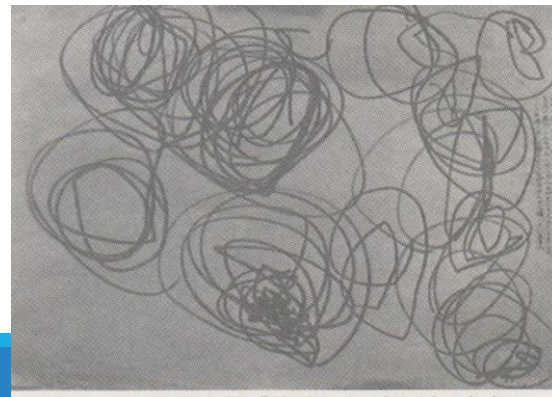


写真5 1歳後半期「連続したぐるぐる丸」

# 1歳半の描画

- ・振幅の短い往復線を重ねたようなぬりつぶし表現が見られることもある。
- ・これは、なんらかの理由で自我を外に広げることができず、気持ちが不安定になっている子どもの、内向した感情表出である場合が多い、と考えられている。
- ・ただし、これを否定的にのみ捉えるのではなく、どう支援していくかなどを見ていくことが大事。



写真4 ぬりつぶし (「絵の“泣き顔”」)



# 2歳前半の描画

- ・2歳になると、肩とひじの協応が充実し、独立したぐるぐる丸を描けるようになる。手の働きを統御して、描線・形を作り出せるようになっていく。
- ・上や斜めに延びていく縦状の線が見られるようになる。この縦状の線は、より意識的に描かれた線。縦線を描けたとき、「あれ？」という感じになる（意識的に腕を動かしたときに生まれた新しい形への驚き）

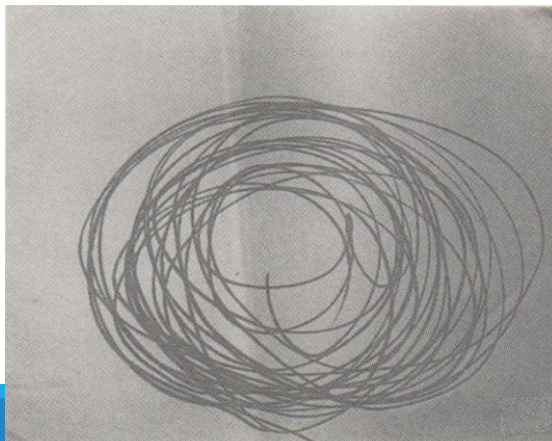


写真6 2歳ころ「独立したグルグル丸」

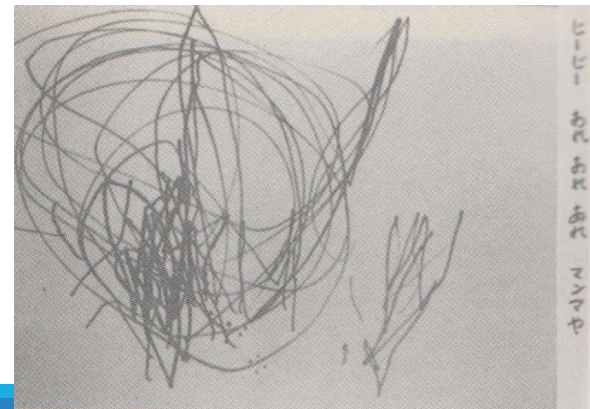


写真7 描線の模索、意識化へのはばたき  
「じーじー、あれ、あれ…？」（2歳すぎ）

# 2歳の描画

- ・描いたものや描いているものを何かに見立てる（意味づける）ようになる。描いたものにイメージを重ねるようになる。描くことが、目的意識的な表現活動に発展していく。（⇔なぐり描きという、腕の運動の遊び）
- ・ただし、まだ、描く初めから〇〇を描こう、という感じまでにはなっていない。

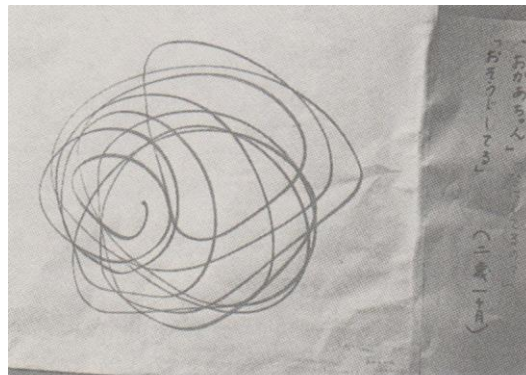


写真9 2歳すぎ グルグル丸を「おかあちゃん」にみたてる（意味づける）



## 2歳前半の描画

- ・1歳時には、手の行為の軌跡を生み出すだけで終わっていた活動が、2歳になると、具体的なイメージと結びついてくる。描いた(描く)ものが、何かを表すシンボルになってくる。
- ・ただし、まだイメージが主導で描いているわけではないので、さっきは「お母さん」と言っていた丸が「おいも」にかわってしまったりもする。
- ・ただ、これは、さまざまな見立てができるという拡散思考と、イメージの豊かさを示すため、否定的に捉えないこと。

# 2歳半の描画

- ・描く際に、はじめから〇〇を描こう、というようになっていく。描くことが、何かを人に伝えるという目的をもった活動になってくる。(感覚運動的な遊びから、イメージを表して伝えるという遊びへ)

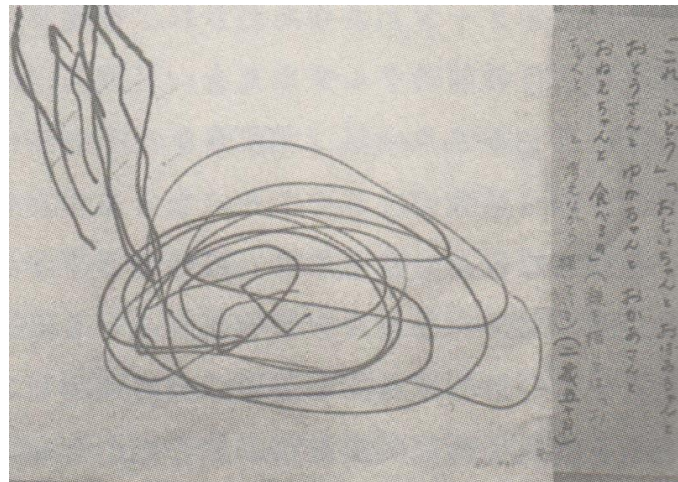


写真11 2歳半ころ つもりで描く  
グルグル丸を「これ、ぶどう」、タテ  
線を「おじいちゃんとおばあちゃんと…」

# 1,2歳時の描画へのかかわりー1ー

- ・「描く」ということに伴う感覚運動を主に楽しんでいる時期であること
- ・筆記用具を持つことや、紙に描くこと自体が、身体機能的に難しい段階であることを考慮すること。
- ・なぐり描きには、自我の拡大の様子や、外界に立ち向かうのびやかさの度合いも表現される。

# 1,2歳時の描画へのかかわりー2ー

- ・かかわる側は、子どもの意味づけや投影する姿を共感したり楽しんだりしながら、それを受け止めようとする姿勢が大事。
- ・描くこと(表現すること、伝えること、遊ぶこと)を、本人が楽しいと感じられるようにしていくことが大事。

# 1、2歳時の描画材料

- ・手の運動がしやすく、感覚的な手ごたえを与えてくれるもの。つまり、持ちやすく、すべりがよく、感覚的には鮮やかなものがよい。
- ・描くときは、両足で立って腰で全身を支えながら、腕を大きく動かせるようにして描くのが基本

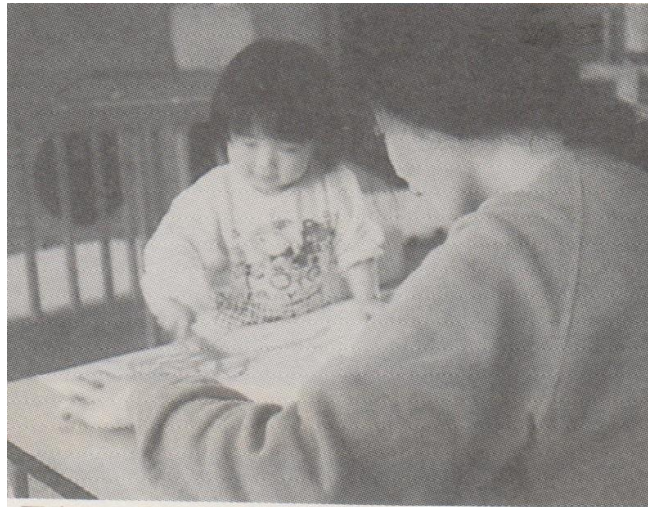


写真14 立って描く

# 1、2歳時の描画材料

- ・水性のフェルトペン／手作りの筆
- ・四つ切り(254mm×305mm)くらいの紙で、すべりのよいものがよい。(印刷物やカレンダーの裏紙等)



写真12 乳児用マーカー「プチマジ」

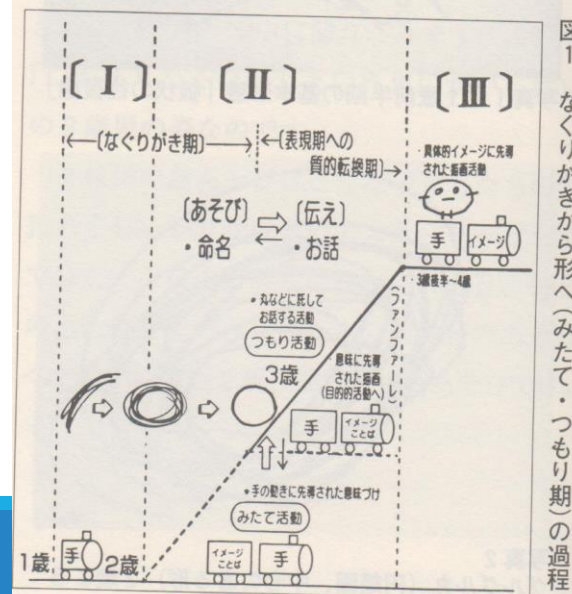


## 2. 3、4歳児の描画

---

# 2歳から4歳にかけての描画の質的変化

- ・「見立て」(あとからイメージを重ねて意味づけること)優先から、「つもり」(あらかじめ目的を意識的に持った活動)優先へ
- ・ことばの発達や知的能力の発達により、イメージの持続や統合力がすすむことも関係している。
- ・見立ての充実が進み、絵を通してお話が作られるようになっていく。



# 3歳児の描画－2つの形態の明確化と構成－

- ・3歳後半になると、大きい丸と小さい丸、大小の丸と線を組み立てる、というように、2つの世界(形態)が明確化されるようになる。
- ・2歳頃から始まる、「他者－自分」「好き－嫌い」「長い－短い」などの、対照的な2つの世界への認識がすすむため。

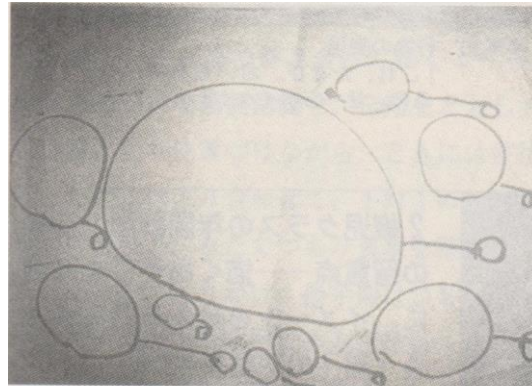


写真26 “ダブルファンファーレ” (大小2つの世界の明確化と構成)

「みーちゃんがコマまわしてるの。たえちゃんは、絵の具入れる小さなお皿でまわさったん。えみちゃん、一人でまわさった。ひろぎくんが、自分で、一人で、はじめてまわさったん。ちこちゃんも一人でまわさった。せいじくんもまわさった。つーちゃんもあおいちゃんも…」

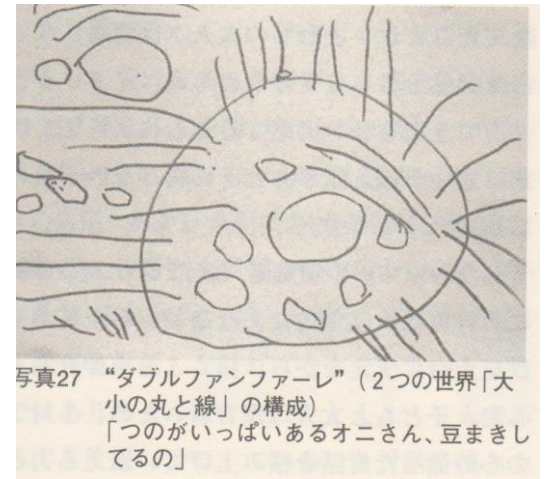


写真27 “ダブルファンファーレ” (2つの世界「大小の丸と線」の構成)

「つのがいっぱいあるオニさん、豆まきしてるの」

# 3歳児の描画－2つの形態の明確化と構成－

- ・この二つの世界の明確化は、他者と自分との関係を踏まえた上で、自我を拡大したり、他者を受け入れたり、ということ象徴していると考えられる。
- ・自己主張しつつ相手に合わせる、といった姿が描画から読み取れる(かも)

# 3歳児の描画－行為を描く－

- ・「行為を線で表す」表現も出てくる

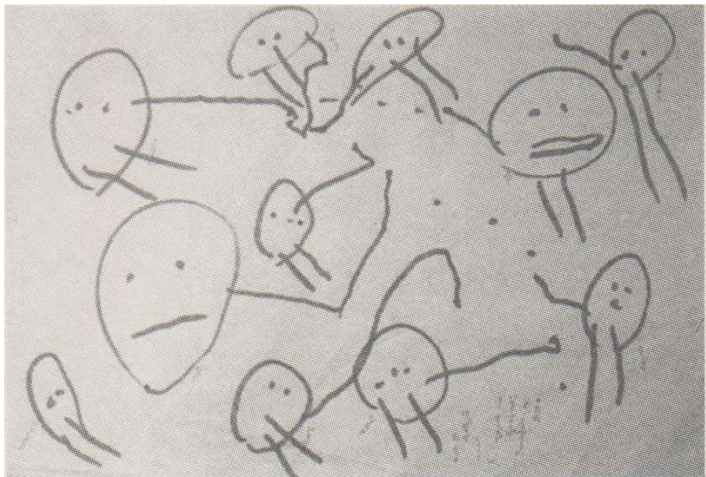


写真29 行為の表現  
「冬いちご採ったよ、葉っぱの下にあったよ。すっぱーい言うてる」

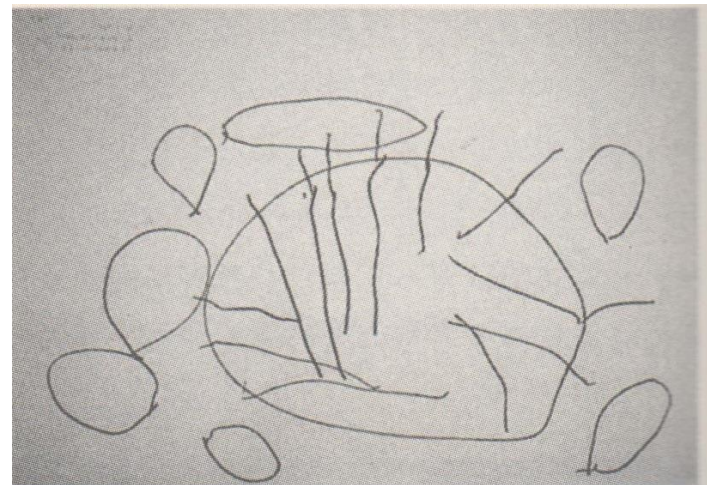


写真30 行為の表現  
「これ、たきび。おいもをポーイって入れるの。せーのポイッ！」



# 3～4歳児の描画

- ・体験したことや見たこと、聞いたことを、具体的なイメージ形象（形）に託して表現する段階へ
- ・人と相互に伝えあえるような、客観性をもった表現が可能となる（誰が見ても何を描いているかわかりやすい表現へ）。社会化されてくる、と言ってもよいかも。
- ・顔の表現が可能に。

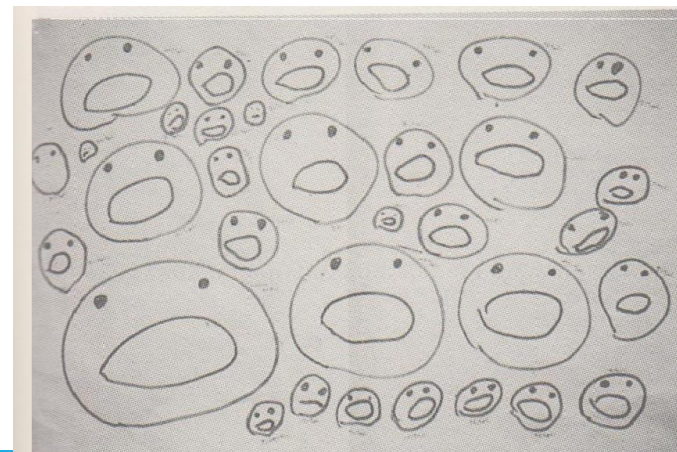


写真2 「顔の歌・あふれる笑顔」  
具体的形象（形）による表現のスタート



# 3～4歳児の描画

- ・全身像を描くようになる。いわゆる「頭足人」。(なぜ頭と足なのかについては、自らの全身を使った活動を実感させてくれるのが二本の足のため、頭と足が描かれる、とも考えられているが、いろいろな説あり)
- ・ただし、画面の上下や位置関係は意識していないため、宇宙遊泳的な表現にもなる。



写真9 (京都)「おにぎりをもって八十八ヶ所へ行くの、みんなで歩いていくの」(まゆこ)

# 3歳後半と4歳前半の特徴

- ・4歳くらいまでは画面に構図がなく、個々の形が画面を埋めるように羅列的に描かれる(「羅列期」)
- ・3歳後半は、顔や頭足人など、同じ単一の形象を繰り返し反復して表現する特徴(頭足人が多いので、「頭足人たちの時代」と呼ぶ)
- ・4歳前半は、画面にはいろいろな形が登場。ただ、あたかも、いろいろな商品が並べられているように表現されるので、「カタログ期」と呼ばれている。

# 4歳前半から後半の描画

- ・4歳までは、言葉での表現には文脈や、描画の形象同士の相互関係は表現されているが、画面にはうまく構図としてまとめあげられていない。
- ・関係の認識と、描画表現との間に矛盾がある。
- ・この矛盾が原動力になり、表現したい気持ちが出てくる。逆に言うと、この時期は、文脈を持った言葉（関係認識）が、絵の表現をリードする時期といってよい。

# 3～4歳児の描画

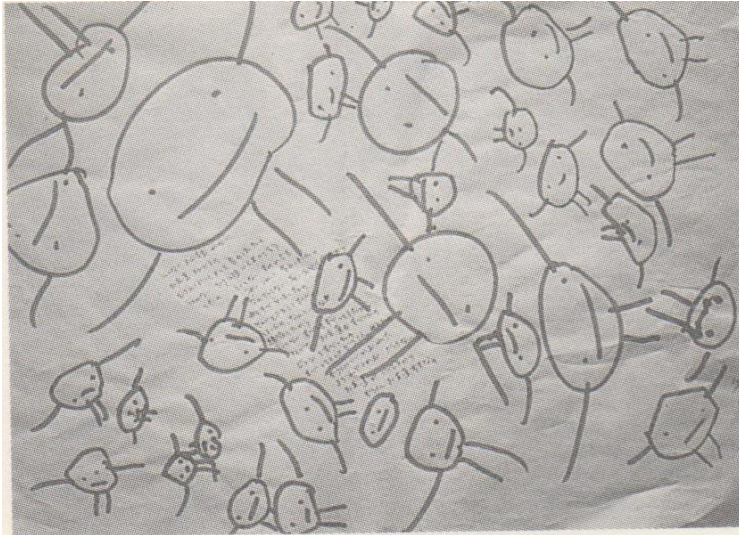


写真3 「頭足人たち」(宇宙遊泳的表現)

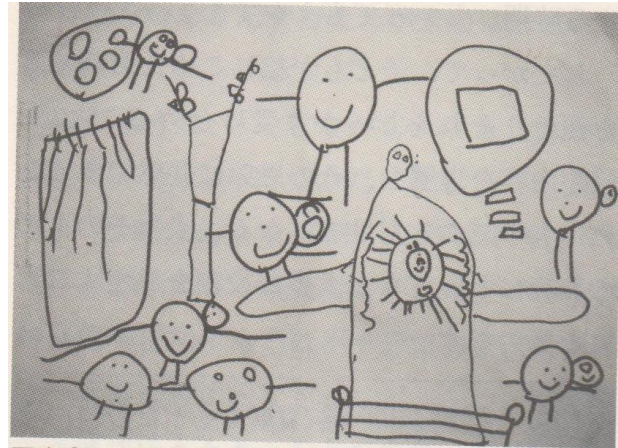


写真2 (羅列期・後期)「カタログ期」(4歳児クラス)  
「万博公園に遠足に行ったの。太陽の塔のまわりで鬼ごっこしたの…」  
(顔のヨコについでいるのは、リュックサック)

# かかわり方

- ・かかわる側は、イメージを共有したり、共有しあう関係を楽しんだりしてかかわるとよい。
- ・のびやかに表現することや、いろいろな素材との出会いを通してそこにイメージを重ねる見立てあそびを充実・展開させるようにかかわるとよい。
- ・3歳以降、平行遊びから連合遊びへと移っていくので、保育士がしきりつつ、集団で絵を描く体験を作っていくこともよい。

# かかわり方

- ・イメージする力の弱い子でも他の子とイメージが共有しやすくなるよう、共通体験を題材にして描くのもよい。
- ・明確な主題をもって描こうとすることが増えてくるため、その力をどのように育てるかがこの時期の課題。



### 3. 5、6歳児の描画

---

# 5歳の描画

- ・4歳のカタログ期を越えて、5歳半前後になると、画面に構図を作り、イメージをまとめあげて表現するようになる
- ・画面空間の系列化(具体的には、基底線表現の出現)



写真3 のあ 4歳児クラス 基底線表現①  
「押し花のお花とりにいったの。ブドーがな  
ってて、小鳥さんがいっぱい飛んできて、  
“小鳥とブドー”の歌を歌ったの。“小さな  
小鳥、ブドーを食べて…”って」

# 5歳の描画

- ・4歳までの、言葉やイメージと描画表現との差が埋まってくる。
- ・つまり、イメージを絵でうまく伝えられるようになる。言葉では言い表せないことを絵で表現できるようにもなる。
- ・また、字も書けるようになってくるので、描けない動作表現を補うために描画内に言葉を入れることも。  
(例:「ぴょん」「どん」など)

# 6歳の描画

- ・5歳の描画がより充実していく感じ。楽しい空想の世界の絵も充実して描けるようになっていく。
- ・より、主題が明確になっていく。
- ・混色を楽しんで、中間色の使用が増えていく。

# 6歳の描画例



写真20 凧あげ 生活画

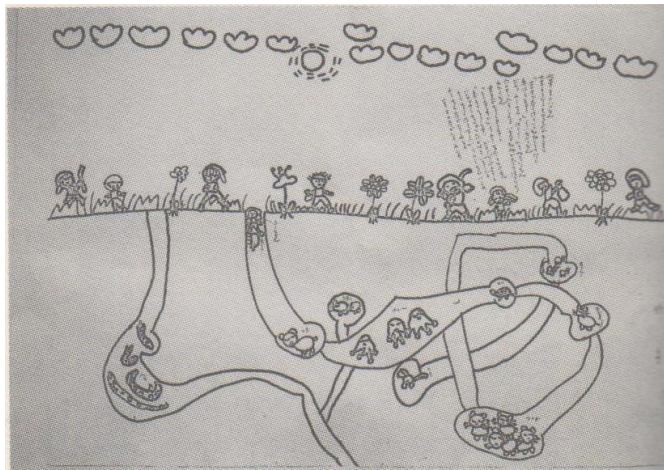


写真22 ふみこ 七草採り 想像(空想)画

「七草採りに行ったん。七草採ってたら、もくろさんが出てきて、『土のなかで春を待っている動物たちのところへ案内してあげる』って言わはったん。だから、ふーちゃん、『行く、行く』ってついて行ったん。  
穴の中に色々な動物が春を待ちながら眠ってたん。亀さんがちょっと目をあけて、『もう春ですか?』ってふーちゃんに聞かはったん。『まだ、もうちょっとです。だけどペンペン草にちっちゃな花が咲いていましたよ。もうちょっと待ってください』ってふーちゃん言ったの。  
ふーちゃんも春が楽しみなの。一年生の春が楽しみなの」

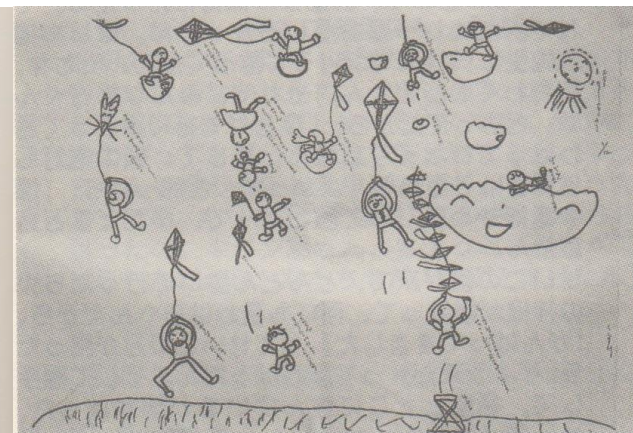


写真21 凧あげ 想像(創作)画

「いたるくんは、ジャンプ台にのってピョンと天までのぼっていかはるの。  
修平くんは居眠りしてたから、靴がぬげてしまったの。  
ぼくは、でっかい雲の上でひるねしたの。  
たけしくんとひろみつくん、あんまりあばれすぎたから雲に穴があいて落っこちたん。たかしくんが『落っこちなよーっ』と言ってる。  
もとあきくんは、二人が落ちてきたからびっくりしてるの。  
ゆたかくんは手から凧がはなれてとんでいったの。  
あいちゃんひろしくんは小さい雲にのって、たこあげ競争してるの。  
なかのゆうちゃんは、きつね凧に乗ってユラユラユラユラのぼっていく。  
たけおくんは、のぼらへんから怒ってるの。  
お日さま、楽しそうやなって、見てるの」



# 基底線表現について

- ・基底線によって、空間が系列化する。画面の上下、左右が定まる。
- ・太陽は、「こちらが上」ということを示す記号として描かれる。
- ・地面が意識されるようになる。



写真6 のあ 5歳児クラス 基底線表現  
「春が来て、チョーチョやトンボが飛んできてうれしくなったの。アリさんはおなか为空いたので、エサさがしにきたの。ほくたちは、リンゴの木を見つけたの。トンボさんとリスさんとウサギさんが、私ら、もうじきすみれ組になるの、と話してるの。リンゴがほしい！ 食べよう…」



# 基底線表現について

- ・基底線に対して人物画放射線上に描かれる「展開表現」も、四角や円状の基底線表現として見なしてよい。

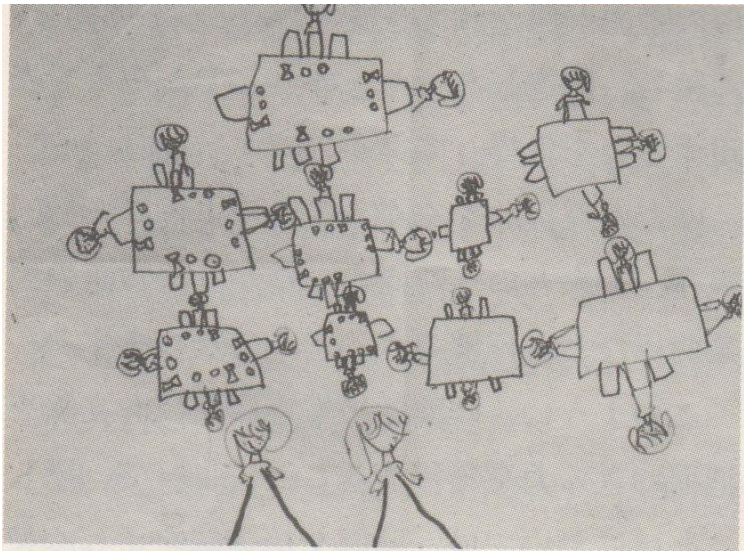


写真4 展開表現（基底線表現）②  
「みんなでおやつ食べてるの」

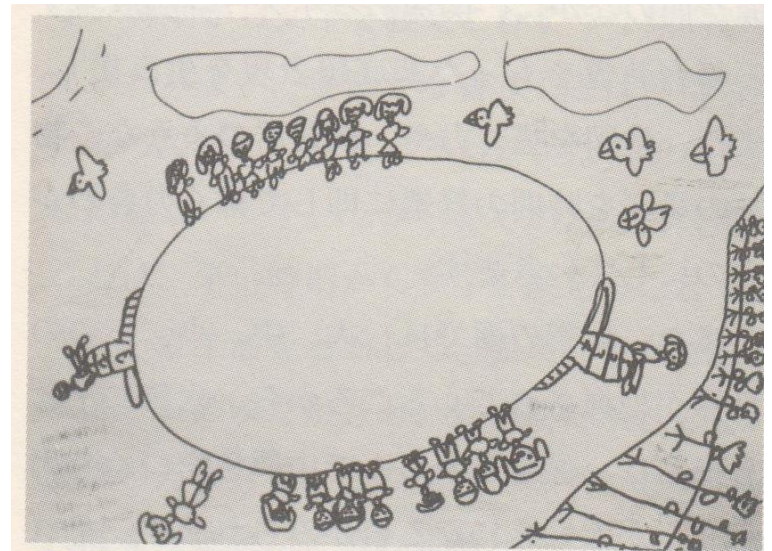


写真5 展開表現（基底線表現）③  
「運動会で跳び箱跳んだよ」

# 2つの世界から3つの世界へ

- ・5歳になると、大小だけでなく「中」が出てくるなど、中間項が形成される。
- ・世界を、連続し、関連しあったものとしてとらえる力がついてくる。
- ・現在－過去－未来のつながりや、物語の因果関係の理解ができるようになる
- ・助詞や接続詞の使用が適切になってくる
- ・色彩でも、混色を楽しんで中間項を楽しんで、完成の細やかさの発達がすすむ。

# 彩色について

- ・線描をしてから色を塗る、ということができるようになる時期。
- ・ただし、彩色する喜びが勝って、近くに合った色を取りあえず塗る、ということが多い時期。塗る楽しみも大事にし、彩色の適切さにこだわりすぎないこと。

# 彩色について

- ・基本色を使っでの表現を中心にし、その過程で適切な絵の具の濃さ(水の量の調節)を身に着けることを主眼に置く。(混色を使っでの適切な表現は6歳くらいでないと難しい)
- ・不では、毛の腰が強く、穂先が使えるものがよい。

# かかわり方について

- ・感性を豊かにしていくことが課題になるため、四季の変化や自然の変化などに気づかせたり、体験させたりすることが大切。
- ・感性や体験したことを表現する力を育てていくことも課題
- ・まだ、書き言葉で自分の思いを記録したり伝えたりできないが、絵によって内面を伝えることができる。そのため、絵を通して表現できる（表現しようとする）力を育てることが大切。

# かかわり方について

- ・この時期、描画表現の目的は、美的表現をすることよりも、イメージを展開することや、絵を通してイメージを伝えることである。
- ・そのため、単色の線描で、無彩色の絵で描くことも大切。
- ・写実的に描くことも大事だが、自分の発見や思いを、気持ちを込めて、話をするように描くことを大切にする。



# かかわり方について

- ・画面いっぱいにもいろいろなものを描きこむことだけでなく、明確な主題をもって(絞って)描く力も育てる。
- ・キャラクターを描くことが好きな時期でもある。それは、ひとりあそびを楽しむ姿として受け止めつつ、その一方で、園の生活の中でイメージの豊かさを育てることも考える。
- ・仲間と共にする生活に根差したイメージを育てることや、表現を伝えあうことも大事にする。

# かかわり方について

- ・4歳、5歳は、自分の表現の上手、下手の矛盾に気づき始め、自信を失うことも多い。
- ・その子らしさを評価しつつ、クラス運営の中ではその子らしさを認めるクラスづくりと価値観の形成を。
- ・仲間の表現から学びあうことも大事。

## 4. バウムの発達

---

# バウムの適応年齢と発達～1～

- ・2歳半、3歳前後(子どもがしっかりした絵を描き始める年齢)から。

この年齢のバウムは、一線幹もしくは、いも状の丸みを帯びた閉じた線が多い。

地面に根付いた「木」になるのは4歳ころから(この年齢は、幹上直、幹下直の形態が多い)

# バウムの適応年齢と発達～2～

・4歳～6歳くらいだと、幹上直の上に、弓状もしくは半円状に「幼弱冠」がついてくる。その後、幹の上端が分岐してゆく。

さらに成長していくと・・・

女の子・・・包冠線を形成してゆく。幹の上部と下部が開いてくるものもでてくる。

男の子・・・幹の上端が、尖ってゆく。その後、枝が分枝へ(山中, 1973)。ただ、中島(2010)の研究では、包冠線を形成して幹の上部と下部が開いているバウムがかなり多い(小6男子で61.5%)ことがわかっている

# バウムの適応年齢と発達～3～

- ・立体的な枝や幹が描かれるのは早くて8歳。お概ね11歳以降。それまでは、実は空間倒置（重力に逆らった実など）で表現される。

10歳前後（小4～5）に、幹の樹頂が紙をはみ出ることが出てくる。14歳前後（中2～3）で、木は紙の中に再び収まってくる。



# バウムの適応年齢と発達～4～

- ・さらに年齢があがってくると、枝の分岐、葉の表現が豊かになってゆく。陰影表現も。

うろや切断された枝なども加わり、個性的な木になってゆく。

山中(2003)バウムテストにみるたましいの成長論.  
岸本寛史(編)山中康裕著作集5巻 たましいの形  
岩崎学術出版社. pp.77-82)

# 継時的変化について～1～

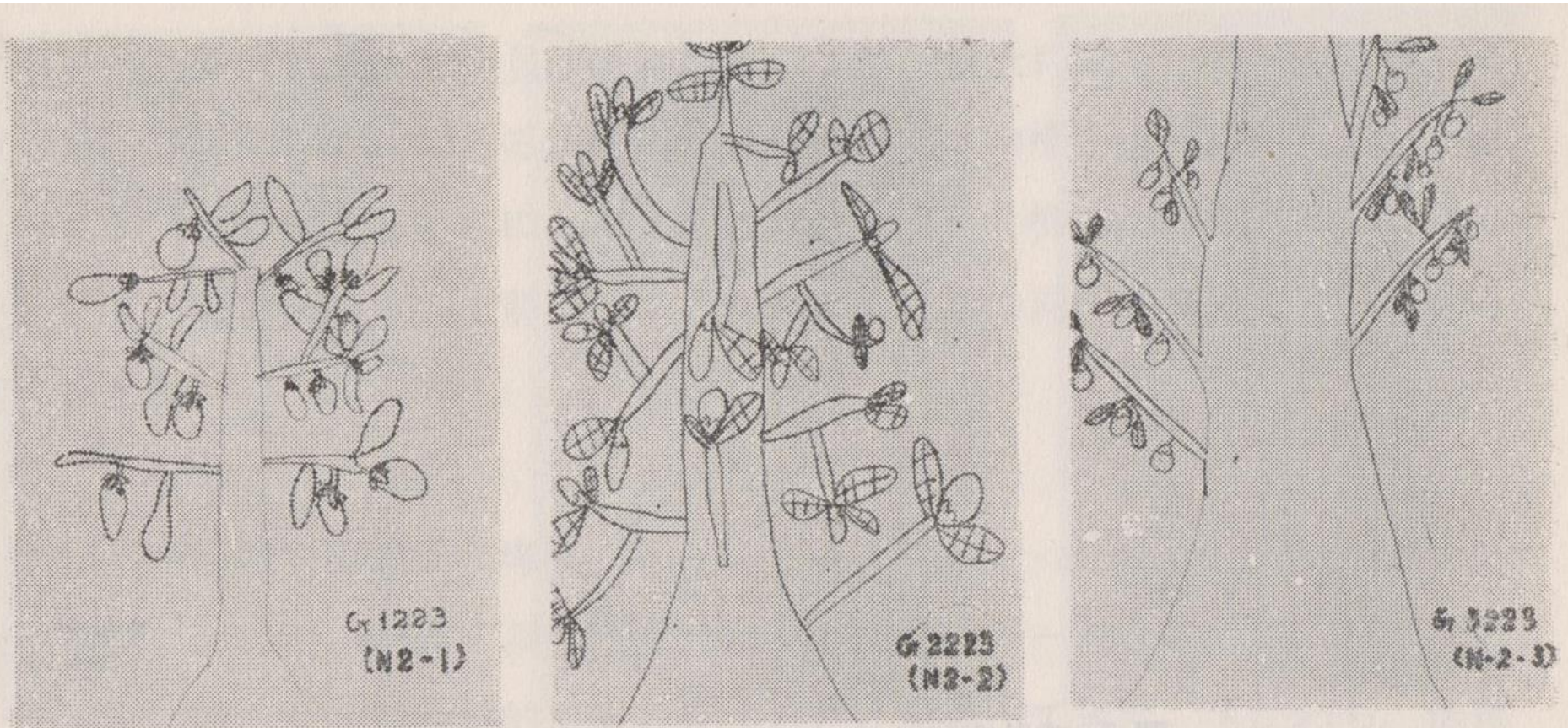


図 6 追跡症例 (1) (左から 7 歳, 8 歳, 9 歳時)



# 継時的変化について～2～

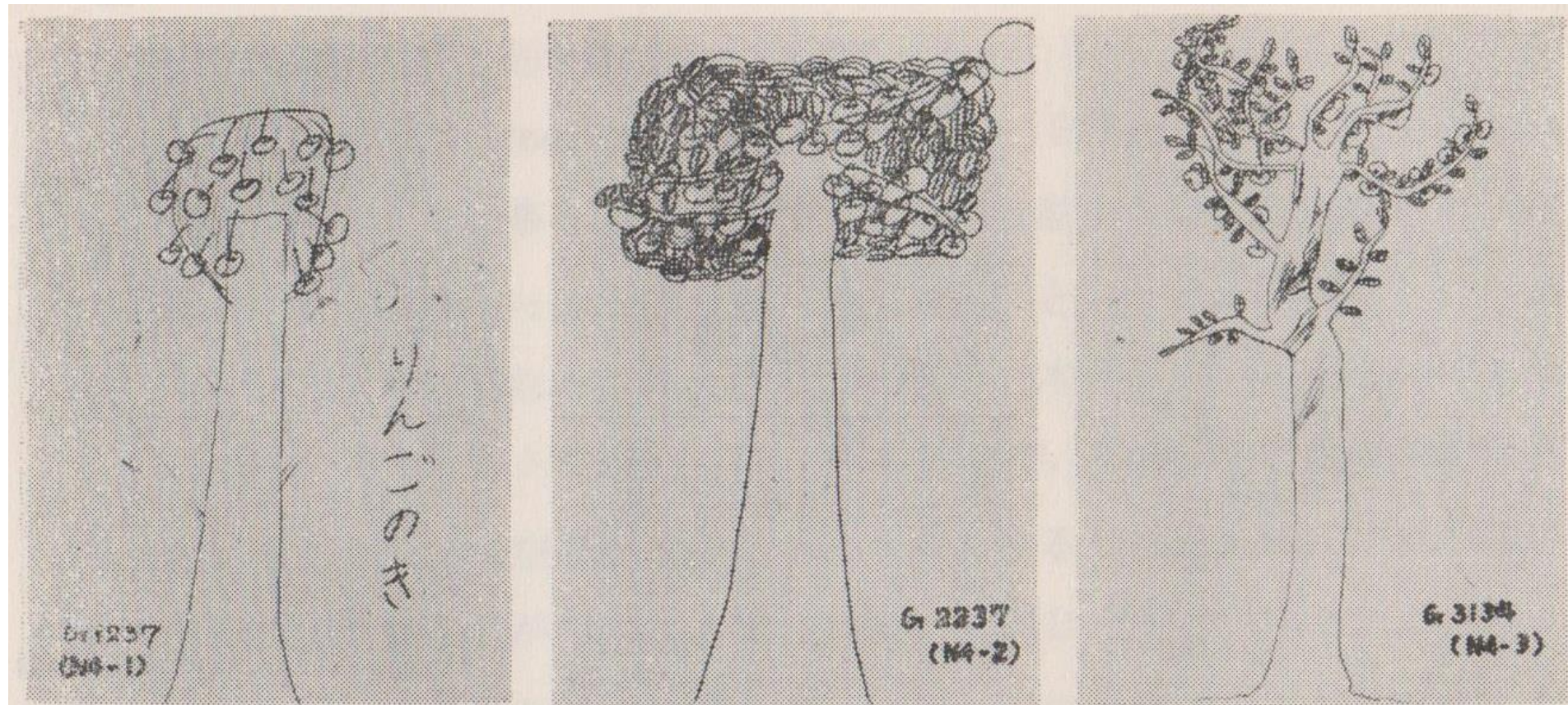


図 8 追跡症例 (3) (左から 7 歳, 8 歳, 9 歳時)



# 双生児研究～1～

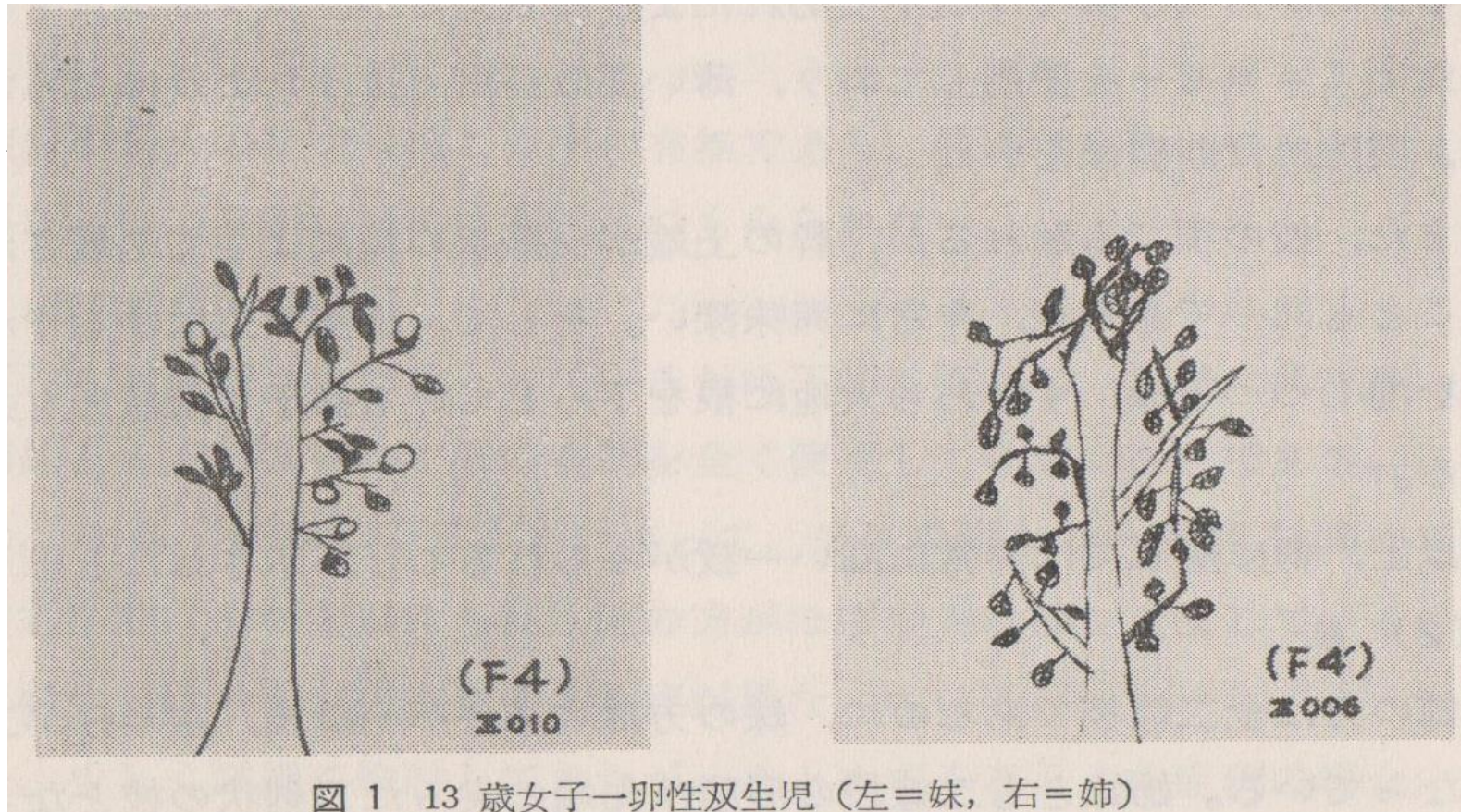


図 1 13 歳女子一卵性双生児（左=妹，右=姉）

非常に似ているが、果実と枝に差が見られる。姉のほうの交差枝は下向き。妹には実がなっているが、姉には実がない。



# 双生児研究～2～

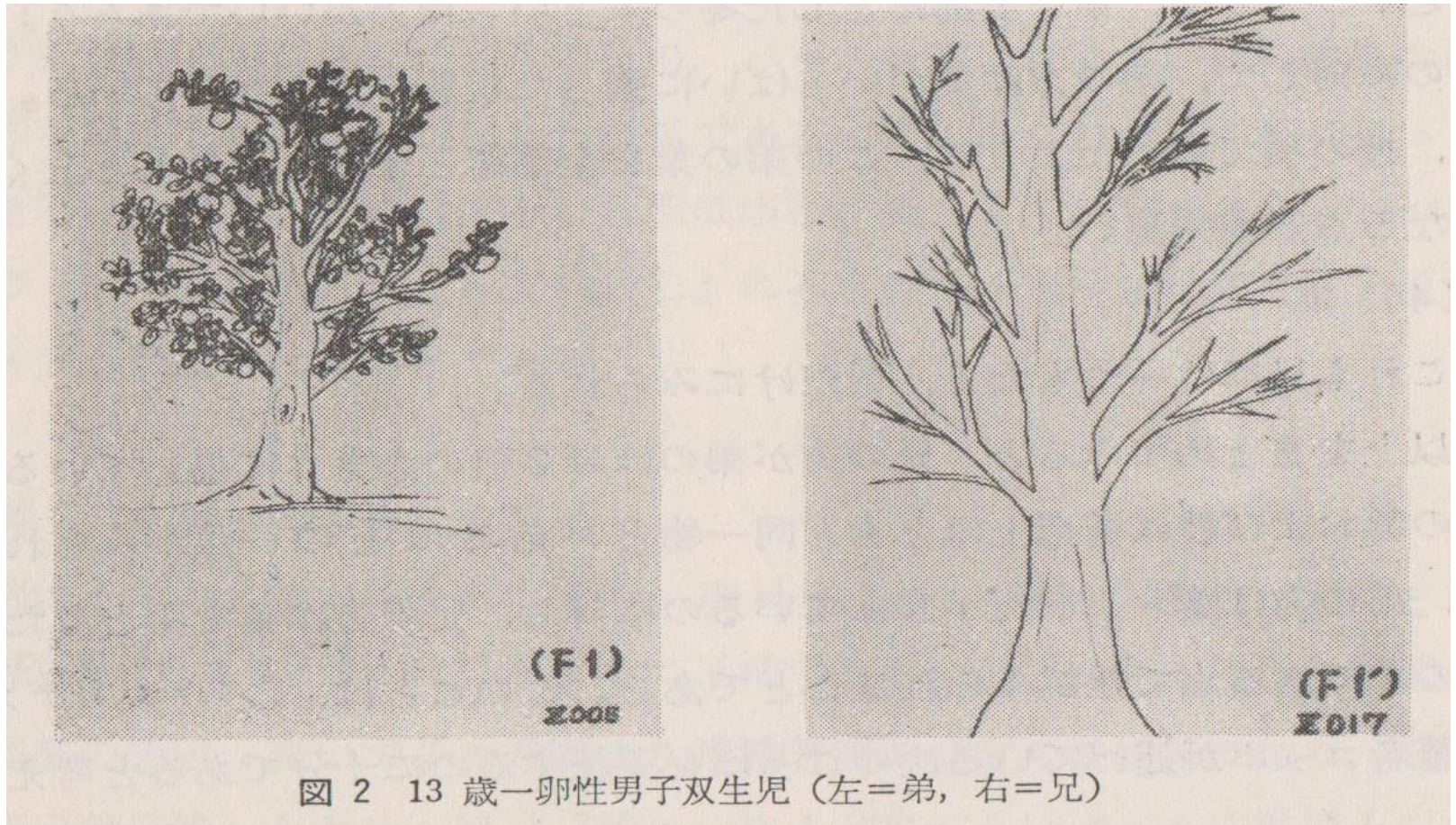


図 2 13 歳一卵性男子双生児（左＝弟，右＝兄）

一見似ていないが、樹冠と幹の長さの比、樹幅と樹高の比、幹の長さ と 太さの比、頂部の分岐具合、幹の傾き具合など酷似。実、葉は兄にはなく、弟は多い。

# 双生児研究～まとめ～

- ・幹や、枝の構成の仕方、幹の中心線から枝や冠までの幅の左右比などは、素質規定性が高い。
- ・実や葉は環境規定性が大きい。



# 学年別の樹型分布(中島, 2010)

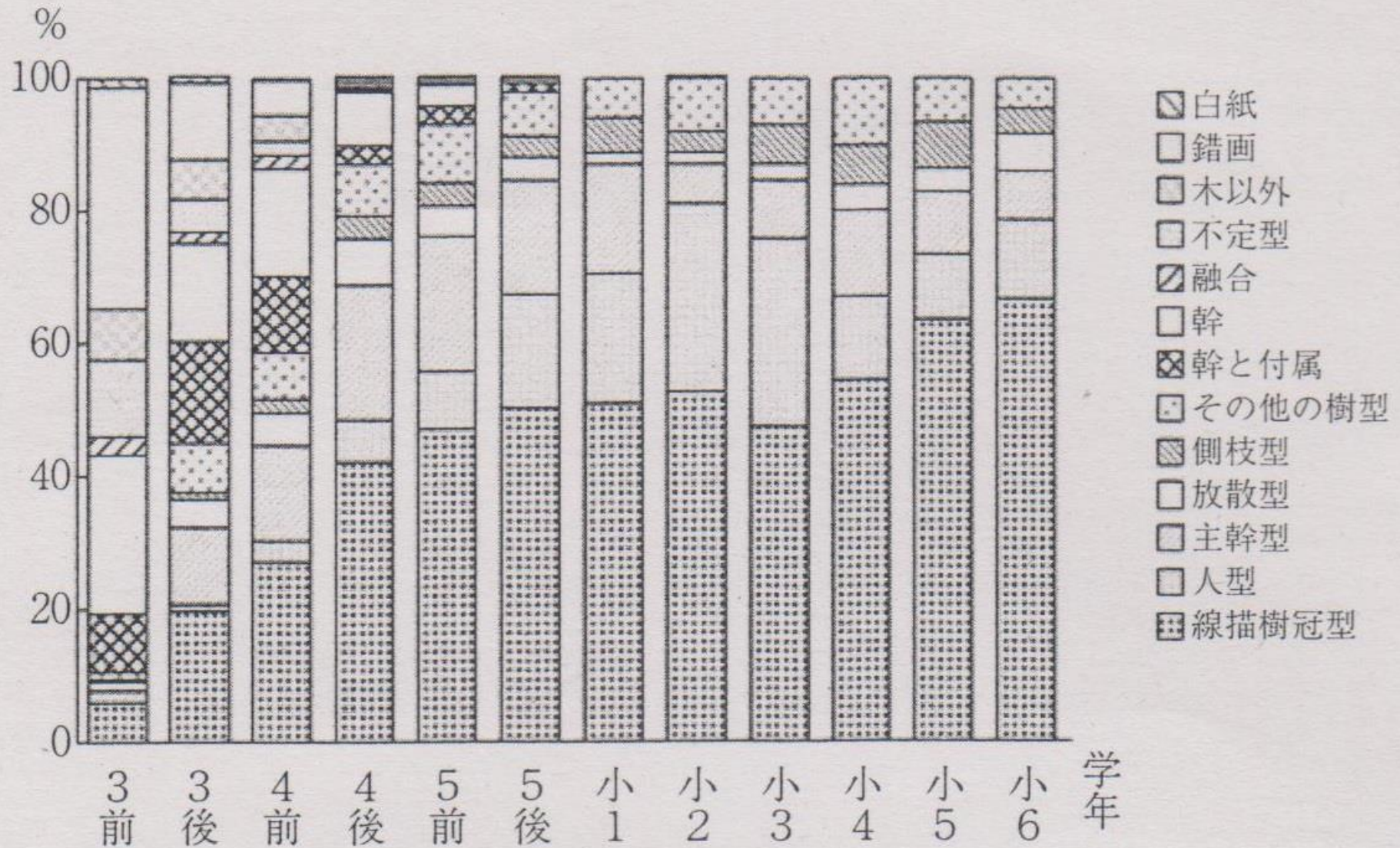


図 26 学年別の樹型分布

# 樹型の類型(中島, 2010)

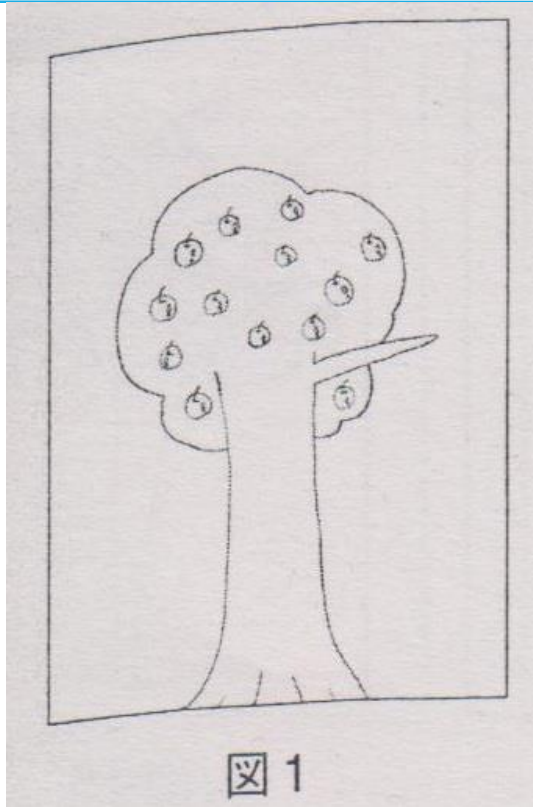


図1

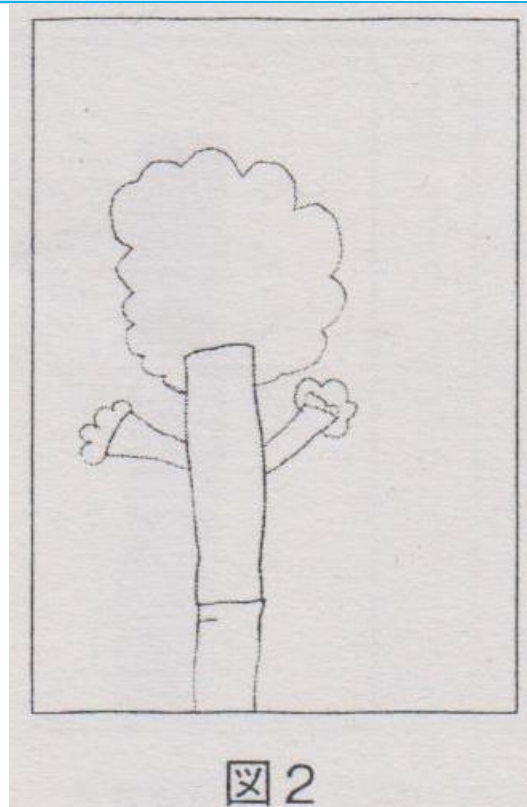


図2

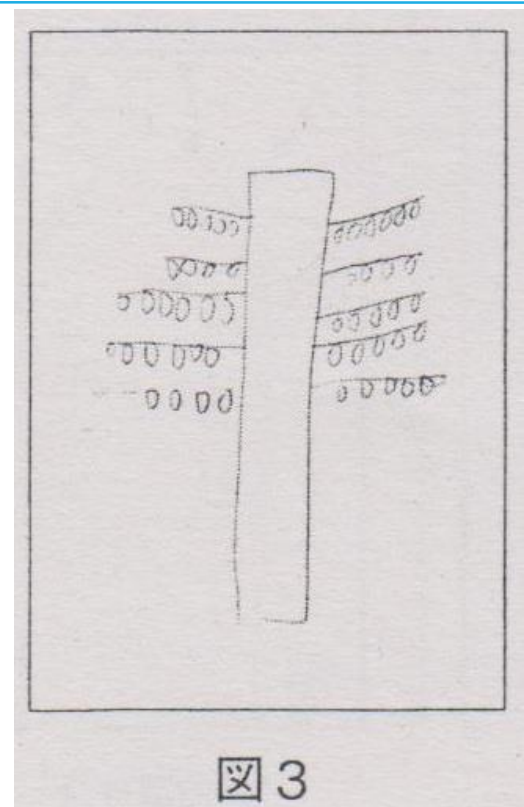


図3

- 図1: 線描樹冠型・・・樹冠に輪郭があり、冠下枝のない樹型
- 図2: 人型・・・「線描樹冠型(図1)に冠下枝がついたもの
- 図3: 主幹型・・・幹が先端まで伸び、しかも枝は幹の側からでた枝(側枝という)のみ



# 樹型の類型(中島, 2010)

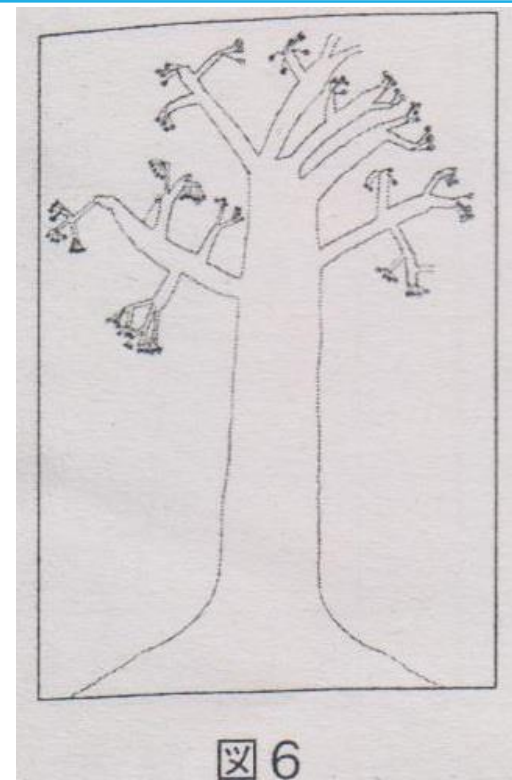
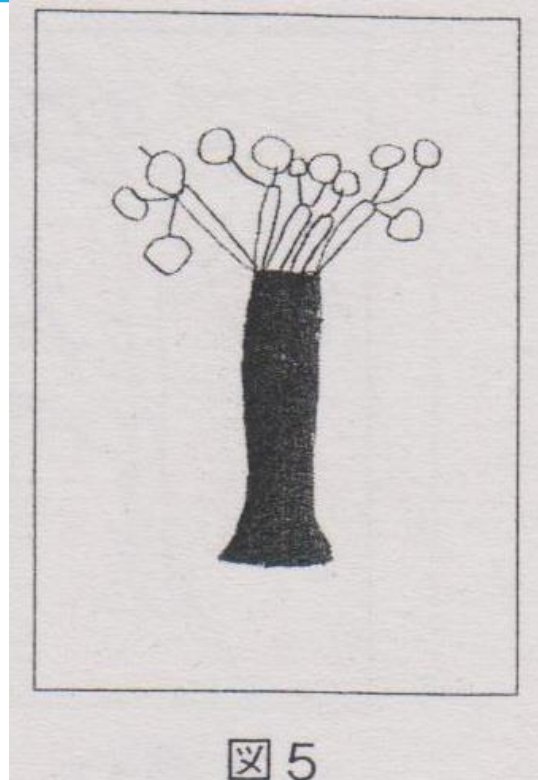
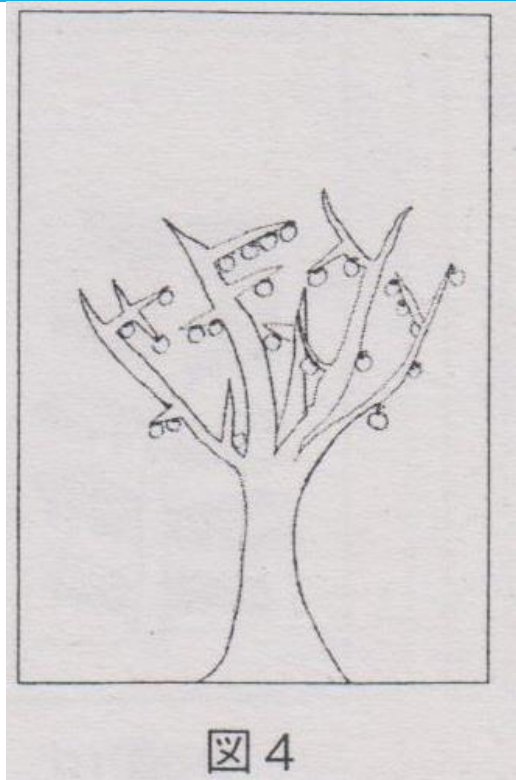


図4,図5: 放散型・・・幹上端から枝が連続して枝分かれしているもの(図4)と、閉じた幹の上端から枝が出ているもの(図5)  
図6: 側枝型・・・「放散型(図4,5)」に枝がついたもの

# 樹型の類型(中島, 2010)

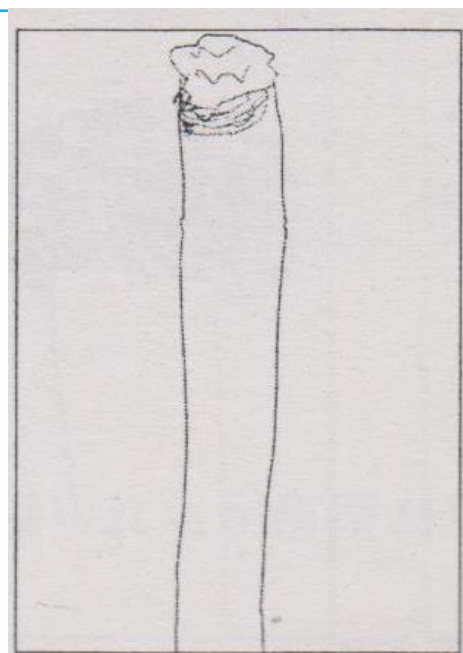


図 19

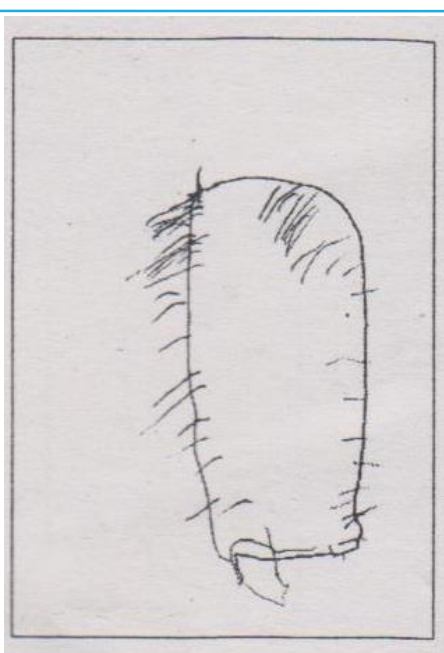


図 20

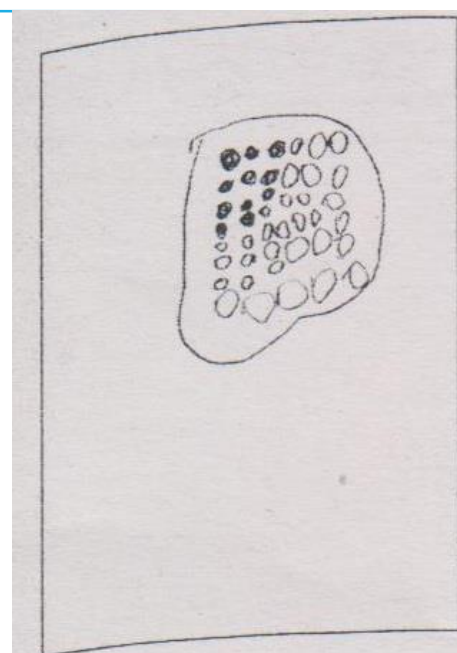


図 21

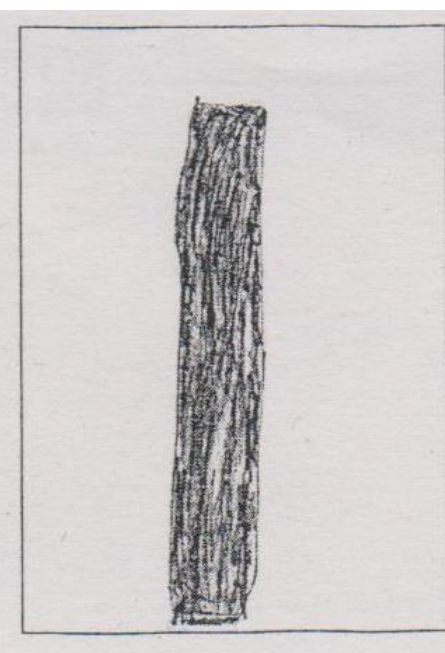


図 22

図19,20: 幹と付属・・幹はあるが明確な樹冠のないもので、  
幹に付属程度の樹冠がついたもの(図19)と、付属程度の枝  
がついたもの(図20)

図21,22: 幹・・・樹冠のない幹だけのバウム

# 樹型の類型(中島, 2010)

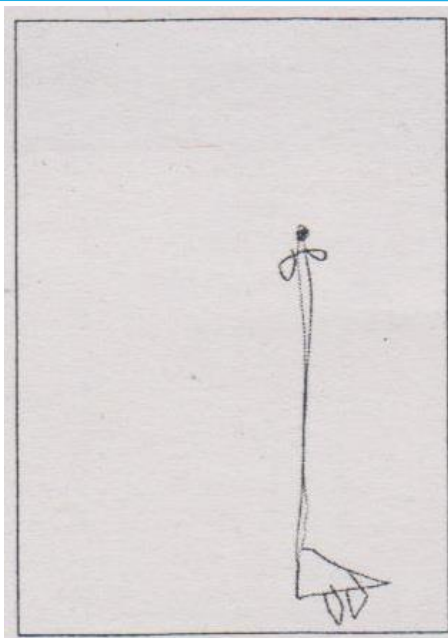


図 23

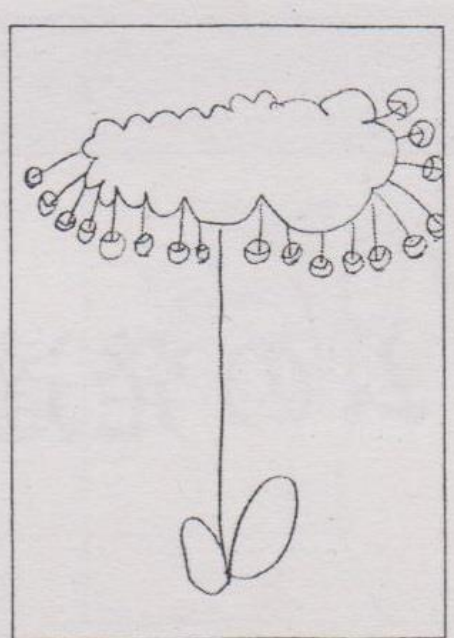


図 24



図 25

図23,24: 融合・・・木としてのイメージの独立性が曖昧なもの。人のイメージと融合して“人のような木”という印象を与えるもの(図23)、花や草本のイメージと融合したもの(図24)など。  
図25: 不定型・・・形は定まらないが気を描こうとする意図が何となく感じられる(藤岡・吉川(1971)の「幼児不定型」に相当)

## 5. 子どもと色

---



# 赤ちゃんの色

- ・子どもの色彩の知覚能力は、大人とあまりかわらない(Tricker & Tricker, 1955)
- ・赤ちゃんの色彩に対する反応が大人と異なるのであれば、興味の向け方や、表現様式が異なることが原因と考えられる。

# 赤ちゃんの色

- ・赤ちゃんは、際立った色に関心を示す。つまり、個々の色よりも、色相互の対比、に関心を払う。
- ・赤ちゃんは、色よりも形に反応する（Fantz, 1963の一連の実験）。（一応、無彩色より有彩色、色味が薄いのもより濃い色に関心をひくというのはあるが（Valentine, 1962））
- ・つまり、赤ちゃん・幼児は、色よりも形に注目していると考えたほうがよく（Kellogg, 1969）、大人が色に対して過度な意味づけをしないことが大切。
- ・実際3歳未満では、とりあえず手に取れたもので描くことが多い。

# 色と発達

- ・3歳頃から、色の名前を習得しだし、色の意味が分かるようになり、色への関心を深めていく。
- ・青・赤の色名がわかり、正しい色がさせるようになるのが2歳（津守, 1961）。
- ・3歳で、色と気分の簡単な対応関係がわかるようになり（Lawler & Lawler, 1965）、4,5歳で色への反応が顕著になる（Sharpe, 1974）。

# 色と発達

- ・4, 5歳で、色の使用の仕方が適切になってくると同時に、色を主観的に選ぶようになってくる。
- ・象徴的な色の使用が可能になるし、子どもの用いた色から子どもの感情的体験が理解できるようになる。
- ・逆に言うと、この時点までは、色彩を子どもの感情体験と結びつけないほうがよい

# 塗り絵の丁寧さについて

- ・塗り絵の丁寧さは、子どもの感情の発露とみるよりは、知的発達や観察力・表現力の遅れとみたほうがよい(千々岩, 1991)



図1 5歳児にぬりえを塗らせた例  
線画から状況を把握し計画的に彩色する女児(上)としない男児(下)の場合。観察力や表現力の違いがいちぢるしい。

# 色の選び方

- ・子どもの色への関心は、年齢とともに変化する。また、男女差もある。
- ・5,6歳児・・・異性を思わせる色を嫌い、同性を思わせる色を好む。(おそらく、大人が性による色のタブーを設けているため)
- ・小学校に入学すると、男女の色の好みは近似。また、小学校6年生の色の好みは大人とよく似ている。



# 色の選び方

・「白」に関しては、日本人は好む（思春期から）が外国は異なる。（文化差がある）

表1 性・年齢別にみた色のトーン別嗜好率（%）

（中小企業事業団と千々岩英彰，1973）

	明 淡 色		中 間 色		純 色		暗 濁 色		無 彩 色		N(人)	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
幼児	17.5	15.5	16.5	4.8	42.5	75.2	8.8	2.7	16.1	1.8	285	335
小6	30.3	37.8	7.3	4.9	48.3	45.9	5.0	2.8	9.4	8.6	480	466
中3	29.0	38.0	5.3	5.0	46.5	40.0	3.3	1.8	15.9	15.1	695	539

表2 性・年齢別にみた嗜好色の順位

		N	1位	2	3	4	5	6	7	8
男 子	幼児(年長組)	56	青*	黒	黄*	橙*	緑*	緑み青*	水色	白
	小学(6年生)	96	黄	橙*	ごくうす い緑	黄緑*	緑*	カナリヤ	白	水色
	中学(3年生)	110	白	橙*	黄*	水色	青*	ごくうす い緑	カナ リヤ	黄緑*
女 子	幼児(年長組)	57	橙*	赤紫*	黄*	赤*	紫*	黄緑*	ピンク	—
	小学(6年生)	92	水色	白	ごくうす い青緑	橙*	青緑*	黄*	黄緑*	緑*
	中学(3年生)	130	白	橙*	カナリヤ	黄*	ごくう すい緑	青緑*	水色	緑*

(\*は純色であることを示す)

# 子どもの配色感覚

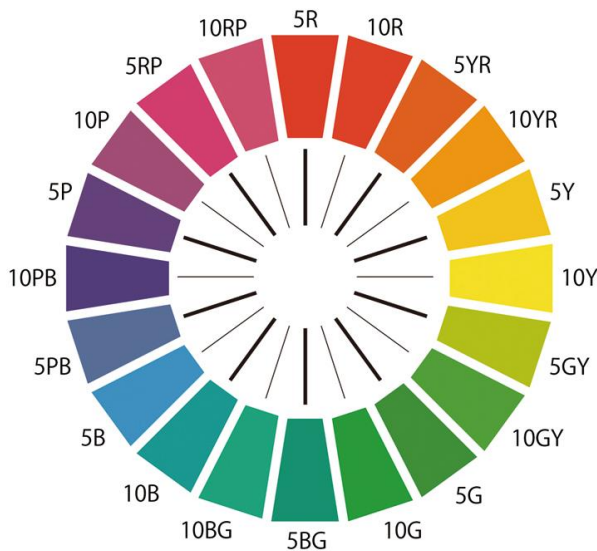
- ・配色感覚も、年齢や性差がある。
- ・女性は幼児期から、“色相を近似させてトーンで変化をつける”という配色感覚を身につけていく
- ・男性は、いくつになっても、これといった配色感覚が身につきづらい

表3 対照配色を好む割合(%)の比較

	幼児	小6	中3	20歳前後	30歳前後	40歳前後	50歳前後	色の構成
男	64.5	53.0	38.6	37.2	43.4	43.0	44.8	色相の異なる 配色の場合
女	37.9	23.9	26.7	36.2	34.4	40.1	43.9	
男	50.3	48.3	48.6	48.7	54.1	46.9	56.3	トーンの異なる 配色の場合
女	52.5	45.7	55.2	61.0	69.5	63.5	66.9	

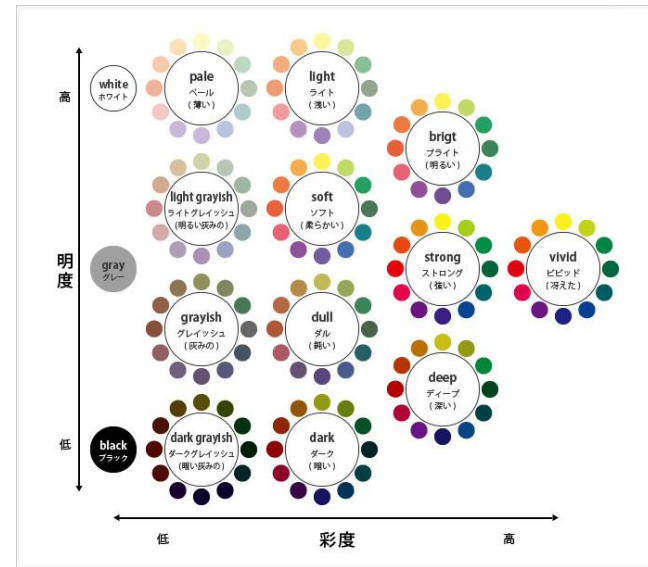
# 色相とトーン

- ・色相・・・赤・青・緑など、色味の違いのこと。色相環でいうと、正反対のところにある色を補色という。
- ・トーン・・・明度と彩度を組み合わせた色の概念



色相環

<http://zokeifile.musabi.ac.jp/%E8%89%B2%E7%9B%B8%E7%92%B0/>より



色のトーン

<http://creators-manual.com/tones/> より

## 6. いくつかの提言

---

# 描画を見る際の視点

- ・子どもの描画は、同じ子でも、時と場合によって変動が大きい  
→一枚だけで判断しないこと。描画だけで判断しないこと
- ・描かれた場や、描かせた人との関係性を考慮する
- ・発達段階(年齢)を意識しながら見ること
- ・表現力だけでなく、表現しようという意欲、イメージの充実度を見ること。それらを充実させていくこと。

# 参考文献など

- ・千々岩英彰 1991 子どもと色—色彩心理学の立場から—臨床描画研究 Annex2, 81-90.
- ・秋葉英則・白石恵理子・杉山隆一 2011 子どもと保育 改訂版 かもがわ出版.
- ・久野武 1990 ヨーロッパ絵画の展開と児童画. 臨床描画研究 Annex2 , 115-133.
- ・中島ナオミ 2010 バウムの発達. 臨床心理学研究, 10(5), 668-673.
- ・山中康裕(1973) 双生児による基礎的研究 1-26. 林勝克・一谷彊編 バウムテストの臨床的研究. 日本文化科学社
- ・山中康裕(2003) バウムテストにみるたましいの成長論. 岸本寛史(編) 山中康裕著作集5巻 たましいの形 岩崎学術出版社. 77-82